

## 世界の住宅エネルギー需要動向を調査

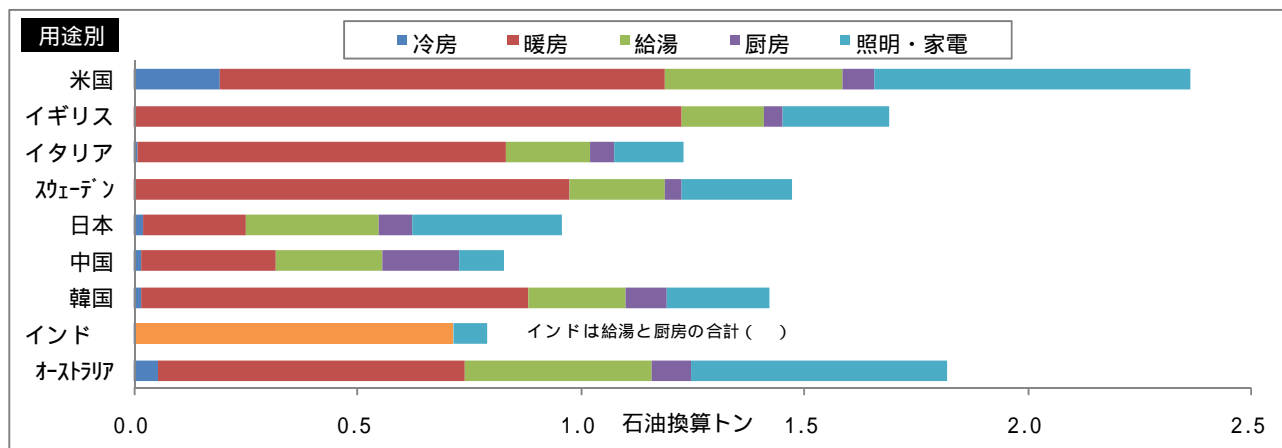
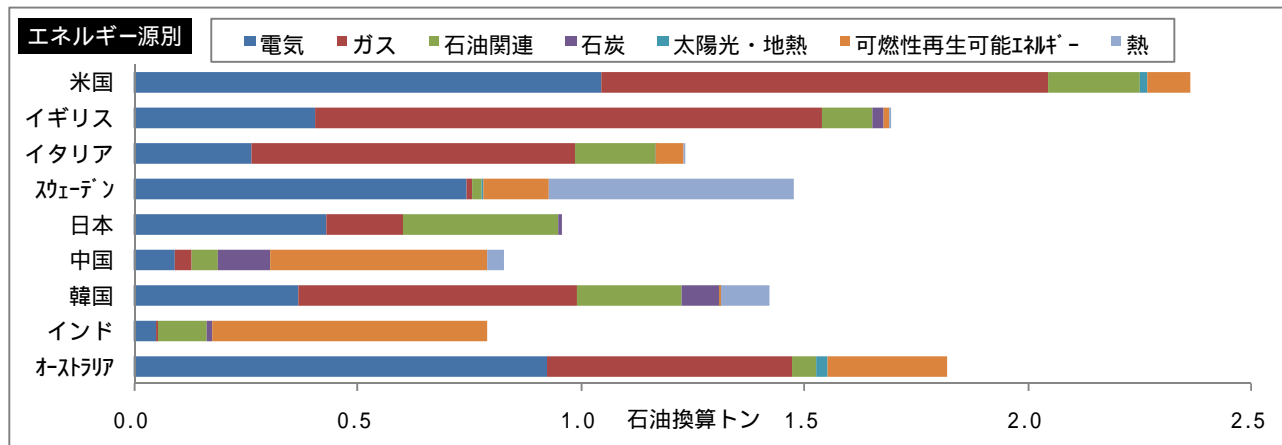
- ・戸当たりエネルギー消費量の上位「米国」「ドイツ」「オーストラリア」「イギリス」「デンマーク」
- ・主要エネルギー源、先進国は電気・ガス、中印など可燃性再生可能エネ。主要用途は欧州中心に暖房

総合マーケティングビジネスの株式会社富士経済（東京都中央区日本橋小伝馬町 社長 阿部 界 03-3664-5811）は、北米、欧州、アジア・オセアニアの各国・地域における住宅のエネルギー需要動向を調査した。その結果を報告書「ワールドワイド住宅エネルギーマーケット調査総覧 2011」にまとめた。

北米、欧州、アジア・オセアニアの15カ国・地域について、住宅におけるエネルギー消費量を、電気、ガス、石油関連製品などのエネルギー源別と、冷暖房、給湯、厨房などの用途別に集計し、各国・地域ごとのエネルギー需要動向を明らかにした。また、基礎データとして、各国・地域の住宅市場の推移を明示すると共に、住宅の構造や特徴、主要な参入企業、各種政策、機器普及状況など関連情報についてもまとめた。

### < 調査結果の概要 >

戸当たりエネルギー消費量（2008年）



各国・地域における住宅のエネルギー事情は、気候、住宅構造、生活様式、政策など、様々な要因によって大きく異なっている。15カ国・地域の戸当たりエネルギー消費量（2008年）は、上位が米国、ドイツ、オーストラリア、イギリス、デンマーク、下位がタイ、インド、中国、台湾、スペインの順となった。日本は10位である。

電気とガスを主要なエネルギー源としている国・地域が先進国を中心に多いものの、その構成比率は様々である。北欧などの寒冷地では熱（地域熱供給システム）、欧米やアジアでは可燃性再生可能エネルギーもそれぞれ存在感を示している。LPG（液化石油ガス）や灯油などの石油関連製品も、各国・地域で一定の需要がある。一方、次世代エネルギーとして注目を集める太陽光・地熱は、まだ僅かな構成比に過ぎない。

用途別に見ると、多くの国・地域で暖房の構成比が高く、欧州において顕著である。ただ、地域熱供給システムが普及しているスウェーデンやデンマークは、寒冷地ながら暖房の消費量がそれほど多くない。一方、冷房の構成比は概ね低く、夏季にそれほど高温にならない欧州ではゼロか非常に低い。セントラル空調の普及している米国、気候が温暖で湿気の多い台湾は消費量が多い。

給湯は、オーストラリア、米国、日本、デンマークで消費量が多い。厨房はアジアを中心に消費量が多く、タイでは消費量全体の7割を占めている。照明・家電は、米国とオーストラリアでテレビや冷蔵庫など家電の消費量が多い。

## < 国・地域別の概要 >

### 北米（米国）

米国は今回の調査対象とした国・地域の中で最も消費量が多く、戸当たり2石油換算トンを超えている。電気とガスが主要エネルギー源であり、それぞれ消費量全体の40%以上を占める。

用途別に見ると、暖房が消費量全体の42%を占める。気候が温暖な南・西部では電気による全館空調システムが、寒冷な北部ではガスボイラによるセントラルヒーティングが、それぞれ主流である。暖房需要の高い北部ではガスの消費量が多く、全館空調システムが冷暖房を兼ねる南・西部では電気の消費量が多い。暖房に次いで、照明・家電が消費量全体の30%を占める。中でも冷蔵庫やテレビの消費量が多い。

米国 戸当たりエネルギー消費量（2008年） 上位3項目

エネルギー源別		用途別	
電気	1.046トン(44.3%)	暖房	0.996トン(42.2%)
ガス	1.000トン(42.3%)	照明・家電	0.706トン(29.9%)
石油関連製品	0.203トン(8.6%)	給湯	0.395トン(16.7%)

注：単位は「石油換算トン」、カッコは戸当たりエネルギー消費量全体に占める構成比

### 欧州

#### 西欧：イギリス、ドイツ、フランス

イギリスはガスが67%、ドイツはガスと石油関連製品が合わせて67%を占めており、両国とも電気の構成比が低い。一方、フランスはガスと電気がそれぞれ30%以上を構成し拮抗している。フランスとドイツは、薪やペレットなど可燃性再生可能エネルギーの構成比も高い。

用途別に見ると、3カ国とも住宅における冷房の需要はなく、暖房がそれぞれ70%以上を占めている。暖房のエネルギー源はガスが主流だが、ドイツやフランスでは石油関連製品も多い。また、可燃性再生可能エネルギーも使われている。厨房のエネルギー源は、電気コンロや電気調理器具の普及が進み、電気が主流となっている。

#### 南欧：イタリア、スペイン

イタリアはガスが主要エネルギー源で、消費量全体の60%弱を占める。一方、スペインは電気が主要エネルギー源で40%を占めており、次いでガスと石油関連製品がそれぞれ20%強で拮抗している。

用途別に見ると、両国とも暖房の消費量は他の欧州諸国と比較して少なく、冷房の需要も一部で存在する。イタリアは暖房のほか、給湯や厨房においてガスが主力エネルギー源である。給湯には電気も多く使われている。スペインは温暖な気候のため、調査対象である欧州の国・地域の中で暖房の消費量が最も少ない。

#### 北欧：デンマーク、スウェーデン

エネルギー源における熱の構成比が大きい。デンマークでは33%、スウェーデンでは37%を占める。デンマークは、熱に次いで可燃性再生可能エネルギーと電気がそれぞれ20%強で拮抗している。一方、スウェーデンは、石油関連製品の消費抑制政策を行っていることから、電気が50%を占めている。

用途別に見ると、両国とも暖房の消費量がそれぞれ65%以上を占める。ただ、エネルギー源構成には大きな差異があり、デンマークが熱や石油関連製品、可燃性再生エネルギーを中心としているのに対して、スウェーデンは電気と熱が中心である。

#### アジア・オセアニア

各国・地域によってエネルギー源別、用途別の消費量構成が大きく異なる。インド、中国、タイでは、農村部で薪や藁などを直接燃焼しエネルギー源として活用しているため、可燃性再生可能エネルギーの構成比が高い。インドは78%、中国は59%、タイは56%を占める。

電気の構成比が高いのは、台湾(65%)とオーストラリア(51%)である。韓国はガスが40%以上を占める。また、オーストラリアは豊富な日射量と補助金政策で太陽熱温水器が普及しており、今回の調査対象国中で太陽光・地熱が最も高い構成比(1.5%)にある。

用途別に見ると、寒冷な韓国では暖房の消費量が多く、61%を占める。床暖房システムが普及しており、エネルギー源はガスが中心である。一方、温暖な台湾、タイ、インドは暖房の構成比がゼロか低い。オーストラリアは暖房が消費量全体の38%を占めているが、地域によって気候が異なるため需要は大きく異なる。

タイは厨房の構成比が70%に上っており、都市部では石油関連製品(LPG、灯油)、農村部では可燃性再生可能エネルギーが主エネルギー源である。中国は、農村部では可燃性再生可能エネルギーが暖房、給湯、厨房の主エネルギー源として使用されている一方、都市部では電気、ガス、石炭、石油関連製品が主エネルギー源となっている。中国では近年農村部で家電の普及が進み電気の消費量が増えているほか、裕福な家庭では石油関連製品(LPG)も使用されている。

中国 戸当たりエネルギー消費量(2008年) 上位3項目

エネルギー源別		用途別	
可燃性再生可能エネルギー	0.487トン(58.8%)	暖房	0.302トン(36.5%)
石炭	0.117トン(14.1%)	給湯	0.239トン(28.9%)
電気	0.092トン(11.1%)	厨房	0.171トン(20.7%)

注：単位は「石油換算トン」、カッコは戸当たりエネルギー消費量全体に占める構成比

以上

#### <調査対象>

【北米】アメリカ合衆国と主要州(カリフォルニア州、ニューヨーク州、テキサス州、フロリダ州)

【欧州】イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、デンマーク、スウェーデン

【アジア・オセアニア】中国、韓国、台湾、タイ、インド、オーストラリア、日本

#### <調査方法>

富士経済専門調査員による政府機関や関係機関へのヒアリング調査、統計情報調査。一部、文献調査を併用

#### <調査期間>

2011年5月～8月

資料タイトル : 「ワールドワイド住宅エネルギーマーケット調査総覧 2011」

体 裁 : A4判 256頁

価 格 : 130,000円 (税込み136,500円)

書籍・電子版セット 150,000円 (税込み157,500円)

調査・編集 : 富士経済 東京マーケティング本部 第三事業部

TEL:03-3664-5821 FAX:03-3661-9514

発 行 所 : 株式会社 富士経済

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2-5 F・Kビル

TEL:03-3664-5811 (代) FAX:03-3661-0165 e-mail:info@fuji-keizai.co.jp

この情報はホームページでもご覧いただけます。

URL : <http://www.group.fuji-keizai.co.jp/> <https://www.fuji-keizai.co.jp/>